未来への提言　こおりやま若者・夢会議

～郡山が大好きと言えた日～

私たちのステータスだった「丸井」がなくなってしまった。

本州最北端、あの仙台にもない「丸井」が私たちの唯一の「誇り」であった。今まで東京の親戚に「郡山には何があるの？」と聞かれ「駅前に丸井があるよ」と言うことが郡山を表現する精一杯の言葉であった。

何か私たちのステータスを失った寂しさが常に胸を覆っていた。しかし、東京の人に「丸井がある」と言っても、有名百貨店が立ち並ぶ都会では、何の驚きも感じなかったのではないかと振り返ることもある。

～それから数年～

久しぶりに友人と街に出てみた。さくら通りを下り駅前大通りに差し掛かると遠くから軽快な音楽と手拍子がペダルをこぐにしたがい大きくなってきた。音の源は、なかまち夢通り。「ジャズだ！」そこには、買い物袋を下げた主婦や私たちと同じ高校生、キャリーバックに腰をかけたビジネスマンが音楽に合わせて手拍子を打っている。その横には、子どもたちがサックスやトロンボーンを弾く真似をしておどけている。

私は、途中から聴いた１曲の演奏であったが、この光景に「大きな夢をつかめそうな予感」を感じ、気がつけば観客の誰よりも早く拍手を送っていた。一緒に来た友人を探そうと「うすい」方面に歩き始めると…。「え、えっ」視線の先には、たくさんのジャズバンドが通り沿いを埋め尽くしていた。「みんなこの通りで練習をしているんだよ。練習でもその演奏の素晴らしさに人が集まり、今ではここは“ミュージックストリート”だよ。明日は、ロックバンドの若者たちの日。これがまたいいんだよね。」とこの通り沿いに店を構える前掛け姿の年配の男性が教えてくれた。

聞くところによると、今オリコンで１位のあのバンドもここで演奏して巣立って行ったらしい。

「月曜日はジャズ、火曜日はロック、水曜日はクラシック…」いろんな音楽が聴ける場所がこのミュージックストリートであった。また、立ち並ぶ飲食店もストリートにあわせ、店内の選曲やさまざまなイベントを開催しているという。

「街に行けば何かやっている」

私たちにはたまらない魅力であり、この街の大きな魅力であると思った瞬間であった。

買い物に来たつもりが音楽を聞き入ってしまい時間を忘れてしまった。急ぎ早に家路に戻る途中の駅前大通りでは、ピアノや音符を形どったベンチに若いカップルが肩を寄せ合い、遠くから聞こえる音色をバックに楽しそうに話をしている。

「ただいま！」
ドアを開けると台所に立つ母親の姿があった。
夕飯の美味しそうな匂いとともに母の歌声がリビングにこだまする。
ＣＤから流れる聴きなれた歌声は、「GReeeeN」だった。

「お母さん、これどうしたの？」
「郡山を応援する歌、オフィシャルソングだよ。
歌のさびの部分は郡山の方言が入っているおもしろい歌なんだよ。」

横で弟がギター片手に私と母のやり取りをクスクスと笑いながら聞いていた。

今日は、久しぶりに早起きをした。いつもは、学校に行く準備に追われ慌ただしく過ごすこの時間も何か物事をゆっくりとみることができた。テレビの時間の表示が「７：００」を表した時、柔らかな音楽が家の外から聞こえてきた。窓を開け音楽が聞こえる方向を耳で探してみた。
「あっ！あのGReeeeNの歌う郡山オフィシャルソングだ。」
母に聞けばこの曲は、朝、昼、夕方に流れるという。
窓を締め振り返ると父が何か言いたそうに立っていた。
「最近、郡山のサラリーマンは、カラオケの最後に“郡山のオフィシャルソング”で締めるのが定番なんだよ。なんつったってグリーンだよ！」
と音楽と言えばカラオケと称する父ならではの一言であった。
私の知らないところで音楽のまちが浸透していることをまたまた実感することができた。

その晩、久しぶりに東京の叔母から電話があった。東京では、「開成山ドリームスタジアム」を中心に行われる「ギネス記録更新！10万人の第九の合唱」のＣＭが流れているという。それも浜ちゃん（西田敏行・郡山市出身）があの格好で釣竿を指揮棒に代え、髪を振り乱しながら指揮をとっているという。郡山出身でもある叔母もこのことがよほどうれしかったのだろうか受話器から漏れる高い声が、リビングにまで届いていた。叔母から電話を代わった従姉妹とも数年ぶりに話をすることができた。「夏に布引高原で行われたＳＭＡＰの５万人野外ライブに来て磐梯熱海温泉に泊まったこと」を教えてくれた。
これらの楽しい会話は、しばらく続き、年末の「第九の合唱」に家族で郡山に来ることを約束しあい電話を終えた。
私たちの電話が終わるのを待っていたかのように父が口を開いた。
「そういえば昔、郡山を舞台とした映画で「百万人の大合唱」という映画があったなぁ」と。

『音楽でこんなに有名になるのか』
『すごいなぁ郡山、やっと自慢できそうだ』

なんだか「大好きな郡山の誇り」を人に話をしたくなった。何かイベントに参加したくなった。訪れた人たちにやさしくしたくなった。
自分のことでもないのに何か満足感でいっぱいになり、目の前に何かあるわけでもないのに「行動したい」という強い気持ちが芽生えたようだ。
そして、何よりも、郡山の人たちが自信にあふれ、「街」が、「人」が生きいきと見えてきた。

～年末のある日～

今日は、ギネス記録のかかる「10万人の大合唱の日」。東京の親戚も集まり、会場に向かおうと外に出ると、まるで郡山全体が自信にあふれているような青い空が広がっていた。

数年前、丸井がなくなりポッカリと空いてしまった私の胸中をこの音楽の街が埋めてくれた。

最近、街では、「郡山に音楽堂ができ海外有名アーチストによる音楽祭が開催される」という噂が流れている。これだけ、みんなが音楽を実感できる街でこの噂は、夢には終わらないと思う。

母から聞いた話だが、70年代に郡山で行われた伝説のワンステップフェスティバルロックコンサートでオノ・ヨーコが歌った曲に「一人で見る夢は夢で終わるけど、みんなで見る夢は必ず実現する」という歌詞があるそうだ。
みんなの夢が叶い、また新しい夢が進み始めた。

こおりやま若者・夢会議

夢会議では、「郡山の魅力を全国にPR～郡山シティセールス～」をテーマに市内の高校、専門学校、短大、大学に在籍する学生・生徒の皆さんに自由な発想で意見交換を行っていただき、結果を提言書として市長へ提出していただきました。
「郡山が大好きと言えた日」は、皆さんの提言を「未来の郡山物語Ⅱ」としてストーリー化したものです。